

# 「結果生かせるのか？ 滅ぼすのか？」

～ 神の恵み、滅びの宝を天へ～

マタイ 6:19-21 第一ペテロ 1:4～13

## ■ 礼拝は人生である

礼拝というのは私たちの人生であると聖書は述べています。1ペテ 1:8にこのような御言葉があります。『あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。』奴隷となったユダヤ人、神に忘れられたのではないかと思っ

ている人たちに語られた御言葉です。彼らはペテロ達と共に過ごす中で変えられて行ったのです。デューク大学というアメリカの大学はクリスチャンの生活について色々な研究をしています。彼らは礼拝についても研究しました。統計的な研究ではありますが、礼拝という行為は、賛美を喜び感謝し捧げる行為・御言葉を聞く・感謝して与えられたものを与えようとする行為……。礼拝の研究の中でこれは人生そのものであるという結果が出ています。イエス様がされた代表的な祈りに「主の祈り」がありますが、その祈りは礼拝です。私たちは毎週礼拝に集う中で、自分の人生をどう生きるかを学んでいるのです。『あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。』（1ペテロ 1:5）これらの事を私たちは礼拝を通して頂こうとしているのです。1ペテロを読むと素晴らしい節理が語られています。漁師だったペテロは驚くほど変えられました。なぜでしょうか？ イエス様と共に礼拝をしたからです。私たちも礼拝によって変えられていくことが出来るのです。それでは、どのようにすればよいのでしょうか？

だからこそ私たちは「本物を取り戻す」という事を何をすることも大切にしているのです。礼拝とは、教会で行われるものが全てではありません。神様を信じる人が集まり、神様を心の中で賛美しつつ神様を知らない人に愛を流していく行為。これこそが礼拝であり、そこでクリスチャンが関わることで、人が変えられていきます。礼拝が濃縮していくと人生が変えられていくのです。

## ■ 預言者（旧約）と現代（新約）での役割

1ペテ 1:10『この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。』とありますが、預言者たちは神様の恵みを真剣に探し求めました。それは、自分のためではなく、神様の恵みを知らない人たちの為の奉仕である啓示を受けた為でした。過去の預言者たちは多くの犠牲を払いながら「調べる」という行為を行っていました。そしてその「行為」に対する役割りが旧約と現在の私たちでははっきりと分けられていることがわかります。現代のクリスチャンである私達が今任されている働きは、私達が任されている恵みを自分のために用いるのではなく、神様の為に使おうという事。神の恵みを受ける為滅びの宝を天に積み上げるという事なのです。だからこそ、私たちは1ペテ 1:13『ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現れるときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。』が大切なのです。1ペテロの前半はこれらの興義について語られています。

## ■ 神の恵み 滅びの宝を天へ

日本の城の城壁は三種類の積み方がありますが、石の形をきれいに整えて積んだものより、自然石を加工せずに積み上げる「野面積み」という積み方が強くなります。城壁は、大砲を打ち込まれるか、地震があった時に崩れるものですが、「野面積み」だと揺れた時にいろいろな形の石がどンドンしまっけていきます。聖書では、教会の姿がこれと同じことだと言っています。この石積みをするために、一人の人が全体を見ながら組んでいく事は教会のようです。神様が私達を集めて、一人一人が色々な訓練を通して割られたり、一つの形になつたりいろいろな面になっていく様を見ながら、「その人をここにあてはめる」「この人をここに置き」と指示をします。それは、地震が起きた時に崩れない為です。その人がその姿に合わせるために訓練をされています。いろいろな種類、いろいろなタイプの石が集まり、揺らされた時にしまっけていくからです。天に宝を積むとは、神様に置かれた場所で奉仕をしていく事が天に宝を積むという事です。多くの方は得意な事をやりたいものですが、こりバーサイドチャーチでは得意な事ではなく、あまり得意でないことと向き合っていることが多いのではないのでしょうか？ あなたがたは信仰により、神の御力によって守られており、終わりの時に現れるように用意されている救いをいただくのです。神様は私一人一人に終わりの時に用意されている恵みを得させるために、今ここで訓練を受けています。

## ■ 神の恵みとは：「恵み」へブル語「ヘセド」

あなたの隣人が飢えているなら食べさせてやり、乾いているなら飲ませてやりなさいと聖書は言っています。

そうすると、燃える炭火を相手に積むことになると言っています。炭は一つだと燃え続けることは難しくなります。炭火を積むとは私達がその人を取り囲む事でその人は恥じ入る心になり、変えていく事ができるという事です。この「恵み」という言葉が初めて使われたのは創世記の次の御言葉です。創 19:19『ご覧ください。このしもべはあなたの心にかない、あなたは私のいのちを救って大きな恵みを与えてくださいました。しかし、私は、山に逃げることができません。わざわざ追いついて、たぶん私は死ぬでしょう。』この箇所は訪れた御使いたちとロトのやり取りが書かれているソドムとゴモラの箇所です。ここではまだ神の声を聞くことはできていません。ロトはこの後妻を失うこととなります。ロトは少しずつ神によって変えられ成長していく姿をみる事ができます。「ヘセド」これは、こんな失敗した私達も赦してください。これが恵みであると伝えられているのです。恵みとはイエス・キリストの十字架です。イエス・キリストは十字架にかかり、その痛みを通して犠牲になる事で私達の長子となりました。そのお兄ちゃんであるイエス・キリストが私達に恵みとは何かを教えてくださいました。恵みとは、あなたが犠牲を払ってその道乗り越えて学ぶときあなたは救いをもたらすものになるということです。

## ■ ベートーヴェンの第九の中に礼拝をみる

ベートーヴェンは「第九」を作曲した人で、耳が聞こえませんでした。ですから、自分の作った和音は想像するしかありませんでした。彼の父親は凶悪なひとでした。オペラ歌手でしたが大して売れなかった為、ベートーヴェンに生活を頼ろうとして非常な暴力をふるいつつ教えていきました。ベートーヴェンは傷つき、その末期は耳まで聞こえなくなりました。その耳が聞こえない中で、音を、和音を想像しながら、何年もかけて「第九」を完成させていきました。彼は迫害と痛みの中でもあきらめないうで、創造主であるイエス・キリストと父なる神の存在を書き綴っていきました。もともと音が聞こえていたベートーヴェンは途中から音が聞こえなくなりましたが、あきらめずに書いたのが「第九」です。神の恵みは私達の前に用意されていますが、私達はその恵みをどうやって天に積んでいっているかを考えなくてはなりません。野面積みの様に正しく積んでいく事ができれば、強固なあなたの糧となっていくます。しかし、私達が理解せず、戦う事を止め、流すことを止めると私達の石垣はもろく弱いものになります。私達が人生のすべての領域の中で礼拝を感じて欲しいのです。神に礼拝を捧げ・賛美を捧げ・誰かの為に献金という犠牲を払い、そして神に再び祈り・信じ・神に栄光を返す。それらの思いが第9の歌詞の中には込められているのでした。

## ■ 神があなたに与えた資産

「資産」はへブル語で「ナハラ」と言います。本来は「相続地、所有地」という意味があります。神様はあなたに約束の地をあたえています。それを腐らさないでください。あなたは強固な矢倉の上に建てられた主の家です。神様はあなたに奇跡をもたらします。

## さいごに

第九の1幕から3幕までは人間の人生を表しています。しかし第4幕からは、神との出会いが始まります。「今までの歌はもうよいではないか。私は神の元で歌う」神への命がけの賛美は後世にのこる名曲となりました。

みなさんの人生そのものが神への礼拝になりますように。現金を天に積むことだけが天に宝を積むことではありません。礼拝でなければ意味がありません。あなたの日頃の小さな行為、あなたがひまわりのようにいつも神様に向こうとする姿勢。その結果が神への礼拝になり人々に奇跡をもたらします。礼拝は賛美の内に癒しをもたらします。それはあなたの生き方が礼拝そのものになって行くときに神を崇めるからです。私たちの一つ一つの手のわざ全てが礼拝となりますよ。そして見る人々は私たちの礼拝する姿をみて神を見ることが出来ます。神様はあなたの礼拝である人生を祝福しようとされておられます。

### — 祈り —

天の神様、私の真剣さをあなたに捧げます。私が真剣にするその行為をあなたが礼拝として受け取ってください。人に指さす事、人に傷つけられたという言葉を取り去って下さい。神様、私を救って栄えさせてください。」

(要約者:辻 総一郎)

(2021年3月14日)